

だから姉にはかなわない・番外編(前編)

\* \* \*

本作は『だから姉にはかなわない』本編の後で  
お読みください

どうしてだろう。

慎くんのこと、ひっぱたいちゃった。

今日は生理痛がひどくて、おまけに学校で面白くないことがあって、ちよつとむしゃくしゃして  
いて。そんな時に「写真撮らせて」なんて言われ  
たから、つい。

「なによ。お姉ちゃんはあるたの金ヅル？ それ  
とも性欲処理の道具なわけ？」

って、ひっぱたいちゃった。

どうしてあんなこと言っちゃったんだろう。

本当は、虫の居所が悪い日だからこそ、気分転  
換に慎くんとイイコトしたかったのに。

だけど……不安なんだ、あたし。

慎くんは、あたしのことどう思っているの？

アタシハ 慎クンノ コトガ スキ。

そんな想いに気付いたのは、実は最近のことだ。  
それも、他の男とエッチしている最中に。

相手は、その頃付き合っていた男。

たまたま、あたしがフリーの時にしつこく言い  
寄ってきた奴で、顔はまあまあだし、ちよつと付  
き合ってみてもいいかな、なんて思ったんだ。

だけど、それが失敗。

口先だけのつまらない男で。

しかもエッチが下手。

さつさと別れた方がいいかな……なんて、入れ  
られてる最中に考える余裕があるんだから、どう  
しようもない。

やっぱり別れよう、って決めた。

そうなると、この退屈なセックスが終わるまで、  
どう時間をつぶすかが問題。

そこで目を瞑って、他の男としてるところを想  
像してみた。

例えば、好きなアイドルや映画俳優を相手にして  
るって考える。

これってけっこう楽しめた。少なくとも、こい  
つに抱かれていますよりずっとマシ。

それで味をしめたあたしは、ちょっとした悪戯  
心で、弟の慎くんとしてるって想像してみたんだ。

……すごかった。

慎くんの顔を思い浮かべた瞬間、あたしはイッ  
てしまった。

すごく感じた。信じられないくらい。

下手なもの、全然気にならない。だって慎くん  
はまだ童貞の筈だもの。

慎くんの初めてをいただいたっちゃった。なんて  
背徳的な空想にとりつかれて、あたしは何度も

いった。かつてないくらいに感じていた。

それで、気付いたんだ。

あたし、慎くんに特別な感情を抱いているのか  
もしれない……って。

その男とはそれきり別れたけれど、以来あたし

は、慎くんのことが妙に気になるようになってし  
まった。

家にいるとき、つい、目が慎くんを追ってしま  
う。

いつの間にか、あたしよりもずっと背が高く  
なって、男らしくなって。

でもよく見ると、けっこうかわいい顔をしてい  
る。

男友達は多いけれど、彼女はいないみたい。

カメラが趣味。

この間、十六歳になったばかりで、今はバイク  
を欲しがっている。

でも、お金がなくて困ってる。

そこである日のこと。

冗談めかして「美人で優しいお姉さまが貸して  
あげようか？」って言ったのに、慎くんてばあた  
しのこと全然信用しないんだもんなあ。

子供の頃にいじめすぎたせいかな……なんて、  
お風呂の中で少し反省。

だけど、部屋に戻る時に慎くんの部屋を覗いて、  
おやっと思った。

灯りがついているのに、慎くんがいない。

自分の部屋に戻ったら、カーテンにわずかな隙間があった。

その向こうにキラリと光る物。

すぐにわかった。

慎くんのカメラのレンズだって。

ピンときた。

スケベ心でやってるんじゃない。あたしの着換え写真、友達に売る気だな。

(……どうしよう、かな)

気付かない振りしてベッドに座り、これからどうしようかと考えた。

慎くんに裸を見られるのは、イヤじゃない。

ときどきするけど……少し嬉しいかも。

スタイルには自信があるから、見てもらいたい。

だけど、その写真を他の人に見られるってのはね……。

でも、ま、いつか。

バイクを欲しがっている慎くんのため。恩を

売っておきましょう。

そこであたしは、特別にサービスしてあげるこ

とにした。

さりげなくバスタオルを落として、裸になつてやる。

胸がときどきする。身体の奥の方が、かあっと熱くなってくる。

もつとエッチな写真、撮らせてあげようか

な……なんて悪戯心を起こしたのは、あたしの悪いクセ。

倒れるように、ベッドに横になった。

胸のときどきが、より一層強くなる。さすがのあたしも、心を決めるのに少し時間が必要だった。だけどその間にも、気持ちはどんどん昂ぶってくる。

そしてあたしは、ひとりエッチを始めた。

慎くんが見ている前で。

慎くんのカメラに写るように。

ちよつと胸に触っただけで、全身に電流が走っ

たような気がした。

胸だけでも、ものすごく感じる。

声が出てしまう。

アソコを触ってみると、もう溢れるほどに濡れ

ていた。

恥ずかしいけれど、慎くんに見えるように、脚を大きく開いた。

そして、指を入れる。

それだけでもう、イってしまいそう。

ひとりエッチでこんなに興奮したのは初めて。

慎くんが我を忘れて襲いかかってこないかな、

なんて想いもちよっぴりあったりして。期待九割に不安が一割。

慎くんに犯されてる光景を想像しながら指を動かしたら、すごく乱れてしまった。腰が勝手に動いて止まらない。

あたしは何度もイってしまって、だけどそれで終わらずにさらに高みへと昇っていく。

気が狂いそうなほどの快感、というのを初めて体験した。

ちらりと窓を見ると、慎くんてばあたしを見ながら自分のモノを手でしごいている。

もう。こっちに来れば、お姉ちゃんがしてあげるのに。

来て……。

来て……。

お姉ちゃんに、入れて。

お姉ちゃんに、慎くんのものいっぱいかけて。その光景を頭の中で描く。

もう、限界。

頭が真っ白になって、気を失いそうになって。

窓ガラスに白いモノが飛び散るのが見えた瞬間、あたしも快感の頂に達していた。

一瞬、意識が遠くなつて。

全身から力が抜けて、スライムみたいに溶けてしまいそうな気分。

だけど、我に返ると急に恥ずかしくなつて、部屋を飛び出してシャワーを浴びにいった。

火照った身体を冷やすように、冷たいシャワーを浴びた。

だけど、動悸が治まらない。

すごく恥ずかしいことをしてしまった。

慎くんてば、あたしのことどう思っただろう。

いやらしい女つて、軽蔑するかな？

慎くんは、エッチな女の子は嫌い？

軽く汗を流して部屋に戻ると、もう慎くんの姿はなかった。窓を開けて、ガラスに顔を近づけると、ほのかにザーメンの匂いがする。

窓ガラスをぺろりと舐めてみると、微かに男の人の味がした。

\* \* \*

それから何日か経ったある日。

慎くんてば、お金を数えてほくほくしていた。

きつと、あたしの写真を売ったお金だ。

ちよつと、いじめちゃおうかな？ また、悪戯心が頭をもたげる。

それに、慎くんがこのままバイクを買ってしまったら、もうあんな刺激的なこととはできないかもしれない。

背後からこつそり忍び寄って、お金を奪い取る。「モデル料」って言ったら、慎くんは可笑しいくらい真っ青になっていた。

まさか、気付かれていたなんて思わなかったん

だろう。

それはお姉ちゃんを舐めすぎというもの。

怯えた表情の慎くんも可愛いけど、あまりいじめすぎちゃ逆効果よね。

だから、あたしは言っておあげた。

「今度は隠し撮りじゃなく、ちゃんとしたモデル撮影で、もっと過激な写真撮ろうか？ その代わりモデル料は七割、ね」

もちろん、あたしの目的はお金じゃない。ただ、慎くんは、そんなことまるで気付いちゃいないんだ。

中編に続く

だから姉にはかなわない・番外編(中編)

そして、運命の夜が来た　　なんて、ちょっと  
大げさかな。

慎くんは『撮影会』って思ってるけど、実は違  
う。

あたし、決めたんだ。

今夜こそ、慎くんを食っちゃおう、って。

お母さんがいない夜。好都合なことに、あたしっ  
てば安全日。

慎くんをナマで味わえるんだ……って考えただ  
けで、ぐっしょりと濡れちゃいそう。

もちろん、いきなりスルんじゃなくて。

できれば、写真を撮っているうちに慎くんが欲  
情して、強引に襲ってくるっていうパターンが理  
想かな。

そうすれば慎くんの弱みを握れるし、あとあと  
優位に立てる。

それに、あたしの前ではいつも小さくなってい  
る慎くんに襲われるっていう、その逆転したシ  
チュエーションにもそそられる。

慎くんを挑発するために、聖陵女子学園に通う  
友達から、市内で一番可愛いと評判の制服を借り  
てきたりもした。

着てみたら、なんだか可愛さ五割増しって感じ。

あたしってばただでさえ可愛いのに、どうしよ  
う……なんてね。

撮影が始まってからも、うんと挑発的なポーズ  
を取ってやる。今日のために、鏡の前でポーズや  
表情を練習してたんだ。

ひとりエッチだって、これ以上はないってくら  
いにいやらしくしてあげた。

やっぱり、慎くんに見られながらするのってす  
ごく感じる。

しかも今回は、あたしの目の前でカメラを構え  
ている。

慎くんのカメラに、あたしの恥ずかしい部分が  
アップで写っているって考えたら……もうイキそ  
う。

だけど慎くんは、期待に反してなかなか襲って  
くれない。

これならどうだ、って感じで、化粧品のピンを

挿入して見せたりもしたのに。

本音を言えば、こんなあたしでも男の人の見て  
いる前でのひとりエッチってすごく恥ずかしい。  
これまで付き合ってきた男たちの前でしたことな  
んかない。

しかも、指じゃないモノ　それもバイブのよ  
うな「エッチのための道具」じゃないモノ　を  
挿入するとなると、恥ずかしさは何倍にも増して  
しまう。

自分がいかにいやらしい女か、ってことを見せ  
つけているような気がして。

それなのに慎くんは、身体を張った挑発にも屈  
することなく、写真を撮り続けている。

だけど……身体は、しっかり反応していた。

すごく、大きくなっている。ジーンズの前が、  
大きく膨らんでいる。

それなのに、まだ襲ってくれない。

ものすごい自制心……じゃないな。慎くんはあ  
たしに対して立場弱いから「お姉ちゃんを襲う」  
なんて考えられないんだろう。

普通に考えれば、わかりそうなものなのにね。

女の子が目の前で、ここまで痴態を見せてあげて  
るんだよ。「いつでもどうぞ」って言ってるような  
ものじゃない。

あんなに大きく、固くしちゃってさ。

動きにくそうに困った顔をしてる。

なんだか、可哀想になってきちゃった。

ごめんね。魅力的なお姉ちゃんのせいだよ。

お姉ちゃんがすつきりさせてあげる。

あたしは「襲われる」ことを諦めると、慎くん  
を側に呼んで、いきなりズボンのファスナーを下  
ろした。

大きくなったおちんちんを握って、引っぱり出  
す。

慎くんは慌ててる。

それは思っていたよりもずっと大きくて、太く  
て。

すごく立派。

慎くんのおちんちんを間近で見たのなんて小学  
生の時以来だから、その大きさの違いに少し驚い  
た。男の人のなんて見慣れているはずなのに。

あたしの頭の中では、慎くんは昔のままの慎く

んだっただ。

「ただ今あたしの手の中にある慎くんは、立派にオ・ト・コ。」

あたしの手の中で、固く、熱くなっている。

「こんなに固くしちゃって。実の姉に握られて感じるなんて、慎くんってやらしいんだ。」

「じ、実の弟のを握るのはやらしいのかよっ?」

「じゃあ、止める?」

「……………やだ」

真つ赤な顔をして、小さな声で言う慎くんが愛おしくって、なんだか嬉しくなって。

そうつと唇を亀頭に寄せて、何度もキスをした。そのたびに慎くんは小さな声を上げる。それから、ぱくりとくわえ込んだ。

あたしの口の中で、慎くんのがビクビクと脈打っている。

あたしの口で、感じてくれる。

もっと感じさせてあげたい。

もっと感じたい。

あたしは今、慎くんフェラチオしている。

慎くん、口を犯されている。

どうしてだろう、こんなに気持ちイイのは。

まるで、口が性器になったみたいに感じる。

「あ……………は……………あっ」

あたしの舌の動きに、慎くんも敏感に反応してくれている。

もともとフェラチオするのは好きな方だけど、今日はもう、本当に熱心に舐めていた。

涎でヌルヌルになったおちんちんを胸で挟んで、パイズリもしてあげる。

先つぽを舐めながら、上目遣いに慎くんを見た。気持ちよさそうな慎くんの表情。すごく可愛い。

そろそろ限界かな……………そう思った瞬間、口の中に慎くんの精が放たれた。

予想以上に量が多くて勢いがあって、一息では飲み込めないくらい。びっくりして口を離したら、顔と胸にもいっぱいかけられちゃった。

普段なら、顔射されるのってあんまり好きじゃないのに、今日は全然イヤじゃなかった。

うっん、むしろ嬉しいくらい。

身体中で慎くんを感じているみたい。

顔や胸にかかったゲームンを指で拭って、一滴残らず舐めてしまった。

美味しい　心の底から、そう思った。

慎くんの味が濃縮された、どろりとした液体。

あんなにいっぱいかけられたのに、もっと飲ませたいって思ってしまう。

「すごい量。ずいぶん溜まってたんだね。それとも、お姉ちゃんのおフェラがそんなによかった？」

「……………」  
慎くんは恥ずかしそうに俯いている。

気持ちよくなかったはずはないけれど、ちゃんと、慎くんの口から聞きたい。

「どおなの？　ちゃんと答えなさいよ！」

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
自分でするのなんて問題になんなくて……………」

へへへへ、やっぱりね。

テクニクには、ちょっと自信あるんだ。

よかったら、もっとしてあげるよ。

あたしも、慎くんをもっといっぱい味わいたいもの。

そして。

そんなあたしの願い通りに、慎くんのペニスはまだまだ勢いを失ってはいなかった。

後編に続く

だから姉にはかなわない・番外編(後編)

あんなにいっぱい出したのに、慎くんのおちんちんはまだ力強く反り返っていた。

それを見て、今のフェラチオで限界に達していたあたしの最後の理性が、音を立てて崩れ落ちていく。

あれが欲しい。

あれを入れて欲しい。

慎くんとひとつつながりたい。

慎くんのおちんちんでイかせて欲しい。

もう、それしか考えられなかった。

口の中に、唾が溢れている。ごくりと、喉を鳴らして飲み込むと、あたしは最後の一線を越える台詞を口にした。

「……お姉ちゃんに、入れてみる？」

ここで「入れて」と言わなかったのが、姉としての最後のプライド。自分の性欲を持て余している弟のために、献身的な奉仕をするお姉さまってわけ。

「え？ えっと、その……」

「正直に言っただけ。お姉ちゃんと本番したくない？ お姉ちゃんの……中に、入れてみたくない？」

あたしは自分のあそこを指で広げて、慎くんを誘った。なのに慎くんは、まだぐずぐずしてる。

「そ……そりゃ、入れてみたい……けどさ……でも、姉弟で……そんな……」

「もう！ ぐずぐずしないでそこに横になりなさい！」

じれったくなつて、大声で怒鳴っちゃった。

慎くんが慌ててベッドに乗る。怒ったあたしには逆らえないんだ。十六年間、そ〜ゆ〜風に仕込んできたんだから。

仰向けに寝た慎くんの上に乗る。

おちんちんを握って、あそこにあてがった。

気持ちいい。

粘膜同士が触れただけで、もう……イキそう。

今すぐに、このまま奥までくわえこみたい。

……だけ。

いいの？

本当に、いいの？

これは最後の一線。

あたしはいつでもOKだけど、慎くんは本当にいいの？

だって慎くんは……

「慎くん……あんた、初めて？」

「……うん」

「初めてがお姉ちゃんでも、いい？」

「……うん、いいよ」

慎くんがうなずいた瞬間、あたしは迷いを捨てた。

すたとんと腰を落とす。

「ああっ！」

「はあああああっっ!!」

一気に奥まで入ってしまった。

一番深い部分を、ズンと突かれた。

それだけで、あたしは軽くイってしまっていた。

「ああ……んっ！ん……あ……んふう……す

っ……すごい……突き上げてくるう……」

大きさも、太さも、文句なし。

それにすごく固くて、熱い。灼けた鉄棒を入れてられてるみたい。

嬉しかった。

とても嬉しかった。

慎くんの筆下ろししちゃった。

この先、慎くんが何人の女の子とセックスしたとしても、初めての相手はあたし。それだけは誰にも変えられない。

多分、物理的な快感よりも、こうした精神的な刺激の方がより強いのだろう。あたしは、これまでのセックスの中で最高の快感に包まれていた。

勝手に腰が動いてしまって、止まらない。

アソコの粘膜が、慎くんのおちんちんに絡みついている。

腰のひと振りごとに、イってしまいそう。

意識してそうしなくても、慎くんの締めつけている。

動く度に、愛液が溢れ出してくる。

まるで、あたしの身体がアソコから溶けだしているみたい。

さ・い・こ・う……。

こんなに気持ちよくて、こんなに興奮するセックスは初めて。

初体験は中学三年。これまでの男性経験は豊富な方だし、感度も悪くないと思うけど、今までこんな感じたことはない。

身体中の全神経が、性感帯になったみたい。

あたしは、無我夢中で動いた。

慎くんの上で、弾むように。

いつもならとっくに果ててしまっくらいに感じているのに、今日はいつまで経っても終わりが来ない。

どこまでも、どこまでも。

あたしは、これまで体験したことのない高みへと昇っていった。

\* \* \*

「ん……ふ……んんっう……」

あの日のことを思い出すうちに、あたしの指はいつの間にか下着の中へと潜り込んでいた。

そこは触る前から、トロトロにとろけていた。

指先で軽く触れただけで、全身が痙攣する。

「いい……気持ちいい……慎くん……」

慎くんとしたときのことを思い出しながら、指を動かす。

下着は邪魔なので、脱いでしまった。

ベッドの上で大きく脚を開く。

「はあっ……っあ……はああっっ！」

右手の人差し指と中指でクリトリスを挟むようにして、前後に指を滑らせる。

指全体を使った長いストロークは、指先だけの愛撫よりも刺激が強い。

なのにそれだけでは足りなくて、クリトリスを擦る手はそのままに、左手の人差し指と中指、そして薬指までを中に入れてしまった。

「ああっ！ ああっ！ あああっっ！」

中を、メチャメチャにかき回す。

痛みさえ感じるほどに。

それでも、あたしは満たされない。

ここに、慎くんがないから。

この指は、慎くんの指じゃないから。

「慎くん……慎くん……ああっ……は……」

慎くんの幻影を追いながら、あたしは夢中で指を動かす。

「ちようだい……慎くんの……欲しいのお！」

慎くん……。

慎くんに抱いて欲しい。

慎くんのおちんちん入れて欲しい。

慎くんにイかせてもらいたい。

ううん、そうじゃなくて。

もう慎くんじゃなきゃ、あたしはイけないの。

慎くんが好きだと気付いたあの日以来、一人

エッチも慎くんのことを考えながらじゃないとイけなくなってしまった。

ただ指を動かしても、虚しさが募るだけ。

慎くんとセックスが一番。慎くんのことを考

えながらの一人エッチでも一応イけるけど、あの時の高みにはほど遠い。

あたしをそこまで連れていってくれるのは、想像じゃない本物の慎くんだけ。

「慎くん……そこ……もっと突いて……そこ

こおっ！ ああっ！」

今日も、やっぱりそうだった。

慎くんにイかせてもらった後はなんともいえない満足感があるのに、一人エッチでいった後はと

ても虚しく思えてしまう。

「はあ……あ」

あたしは、大きな溜息をついた。

その直後。

「あの……姉貴……？」

躊躇いがちな声。

一瞬空耳かと思っただけけど、そんなはずはない。

慎くんの声。

慎くんが、困ったような表情で部屋の入口に立っていた。

ということ……。

い、今の、見られちゃったのっ？

何度も何度も慎くんの名前を呼びながら、一人エッチしてたのを？

ヤダ！ そんな！ それってマズイよ。

あたしは身体を起こした。下半身が丸出しだったの、慌ててスカート裾を引っ張って隠す。

「な、なにしてんのよっ？ へ、部屋に入るならノックくらいしたらどうっ？」

真っ赤になって叫ぶ。だけどこれは完全な言いがかりだ。ノックといっても、そもそもあたし、

部屋の扉を閉めた記憶がない。

知らず知らずのうちに、扉を開けっ放しで一人エッチしてしまったんだ。

続く言葉は出てこなかった。

あたしは耳まで真っ赤になって、俯いていた。

初めて、慎くんに弱みを見られてしまった。

最初の方は意図的に見せてあげたものだし、イニシアチブはあたしにあった。第一、あの時は慎くんの名前なんて呼んでいない。

まったく無防備の一人エッチを見られてしまうなんて。

それも、オカズにしていたその相手に。

これまでの人生の中で、これほど恥ずかしいことがあっただろうか。

「あ、あの……姉貴に話があつて……そしたら、ドアが開いてて……俺の名前が聞こえたから、その……」

慎くんも、真っ赤になってしどろもどろに事情を説明する。

「……何よ？」

あたしは涙目で慎くんを睨んだ。

「……話つて何よ？」

「……先刻の、写真のことなんだけど……」

「それなら断つたでしょ！」

「姉貴、誤解してるんじゃないかと思って……」

そう言つて慎くんは、持っていた一冊の雑誌を差し出した。

あたしはそれを受け取つて目を落とした。

「……え？」

もう一度、手の甲で涙を拭つてよく読み直す。

確かにあたしは、大きな勘違いをしていた。

慎くんが言つた「写真」つてのは、これまでみたいないエッチなものじゃなくて、真面目な写真雑誌で募集しているコンテストだったんだ。

それに応募するためのモデルになって欲しいということらしい。

あたしは呆然と、雑誌と慎くんの顔を交互に見た。

「でも……どうして？」

「ぼんやりとつぶやく。」

「どうして、お姉ちゃん？」

そのコンテスト、別に人物写真やヌードに限定

されてるわけじゃない。そもそも慎くんは普段、風景写真を撮ることが多かったはず。

「それは、その……」

慎くんは口ごもった。

なんだか、言いたくないみたい。

「何よ、はっきり言いなさいよ」

「その……つまり……」

赤くなって、あたしと目を合わせないようにしてる。どうして？

慎くんがおどしているおかげで、あたしはいつもの「お姉ちゃんモード」になることができた。

「ちゃんと言いなさい。言わなきゃモデルなんかやってあげない！」

慎くんは諦めたのか、小さく深呼吸してぎゅっと拳を握った。

「こ、この間、気付いたんだ。あ……姉貴が、俺にとつていちばん魅力的な被写体なんだって！」

真っ赤になって、そう叫んだ。

あまりにもストレートに言われてしまって、あたしもすぐには反応できなかった。

いつものように軽口でかわそうと思ったけど、言葉が浮かばない。

だけどやがて、胸の奥の方から暖かいものが広がってくるのを感じた。

知らず知らずのうちに、頬が緩んでしまう。

あたしはもうすっかり元気になって、元の「お姉ちゃん」に戻っていた。

だって、弱みを持つているのはあたしだけじゃないってわかったから。なにも、弱気になることはないんだって。

「そおね。条件次第では、モデルになってあげないこともないけどお？」

余裕の表情で言う。慎くんはやっぱいつものように、あたしの前では少し腰が引けている。

「わかってるんでしょ？」 条件が何かってことくらい。お姉さまにものを頼むには、それなりの礼儀つてもものがあるわよね？」

あたしはスカートの裾をつまんで、ぴらぴらとめくって見せた。下着は先刻脱いじゃったから、ヘアが丸見え。それで慎くんも理解したらしい。「わ、わかってるよ！」

慎くんはその場で土下座して、床に頭を擦り付ける。

「今夜は精一杯頑張つて、姉貴を満足させます！だからモデルになつてください！」

うんうん。やっぱりこうでなくつちや。

慎くんとエツチするにしても、あくまでも主導

権はあたしになくちやね。うじうじ悩んで一人

エツチなんて、全然あたしらしくない。

「今夜だけえ？ 母さんは明日も留守なんだよ

ねえ？」

相手が下手に出ると、あたしはいくらでも偉そうになれる。

こんな自分の性格が、実はちよつと……いや、かなり好きだったり。

「ちよ、ちよつと待つてよ！ あんなに激しく二日もやり続けたら、俺、マジで死んじゃうよ！」

「だいじょくぶ。慎くんのつてすごいもん。それに今夜はお姉ちゃんが、特製スタミナ料理を作つてあげるから」

うんと偉そうにして、とことん苛めて。その後でちよつとだけ優しくしてあげる。

これでもう慎くんはあたしに逆らえない。

慎くんの身体に染みついちゃつてる習慣。十六年間、こうして躡けてきたんだもの。

そう、なにも慌てる必要はなかつたんだ。

生まれたときからずっと、慎くんはあたしのものだもん。

あたし、知ってるよ。

口ではどう言つても、強気なお姉ちゃんに命令されたり、わがまま言われたりするのが好きなんだつて。

実は、マゾツ気があるのかもね。

だから、慎くんはいつまでもあたしにはかなわないんだ。

## 閲覧に関する注意事項

このPDFファイルは、画面での閲覧、紙への印刷の両方に適合するようにレイアウトされているため、閲覧時にはちょっとした工夫が必要です。

### モニタ上での閲覧

モニタ上で読む場合、ブラウザやアクロバットリーダーのサイズを横長にして、ちょうど半ページが画面に収まるようにしてください。すると、Enterキー(Returnキー)で半ページずつ読み進めていくことができます。

画面解像度が高い場合(1280×1024以上)、ウィンドウサイズをできるだけ大きくして、1ページ単位で表示することもできます。その場合は、表示モードをデフォルトの「幅に合わせる」から「全体表示」に変更します。

なお、モニタ閲覧には旧タイプのレイアウトの

方が適しているかもしれません。(その代わり、旧レイアウトは印刷向きではないのです)

どうしても旧レイアウトで読みたいという方は、北原宛にその旨メールでお知らせください。個別に対応いたします。

### 印刷しての閲覧

印刷して読む場合、用紙サイズはB5を使用します。

印刷実行前に、アクロバットリーダーのプリンタ設定を確認してください。

高性能のレーザープリンタを使用する場合、プリンタの「2ページ印刷」の機能を用いた方が、実際の本に近い文字サイズで読みやすいかもしれませんが、(縮小してB6用紙に印刷するのでも可)

アクロバットのバージョンが4の場合、印刷が極端に遅くなる場合がありますが、これはソフトの仕様によるものと思われるのでご了承ください。